5．平成16年度大学研修コースの具体的な展開
－実施状況・課題・展望－

教科教育キャリアアップフィールド（国語）
コース名：国語の基礎学力

国語教育専修　　根　岸　泰　子

1．コース「国語の基礎学力」における研修内容の概要

今回の根岸担当のコースは，「国語の基礎学力」と題して，国語科および総合学習を想定しながら，そこで具体的に求められている国語の基礎学力とはどのようなものであるかを国語科教育の理論（鶴田清司ほか『あたらしい国語科指導法』，学文社，2003）をもとに概説し，さらに現行の国語教科書テクストを具体的に分析していくものである。

具体的には，第１日目に，「国語のコア」とは何かを中心に，教科内容の確認・子どもたちを取り巻く環境の考察・具体的な指導法（文学解釈，話すこと聞くことの課題）について講義形式で学習，第２日目までの期間はAims-Gifuを用いて根岸および研修生相互で，自分のクラスでの体験等を交えながら掲示板システムを利用したディスカッションを行い，第１日目の講義内容の実体的な把握を互いに確認し合った。最終の第２日目には，Aims-Gifuでのディスカッションから浮かび上がってきた問題意識をベースに根岸が新たに講義を構成・展開し，さらにそれらについてのディスカッションを行っている。

参加研修生は計５名で，たまたま全員が小学校教員であったため，問題意識にも共通点が多く教材の選択も小学校教材に統一でき，非常に効率的にすすめることができた。またインターネットの利用については個人間でのばらつきが若干出たものの，講義内容の周知期間にインターネットを利用する旨のアナウンスができたため，比較的ネット利用に習熟した研修生を集めることができた。また掲示板の利用を通して，それまであまりネットワークに接したことのない教員が，ネットワーク利用の効果をビビッドに体験できたことも大きな収穫だった。

2．実施状況

(1) 第１日目　８月２日（月），10:00-16:00

研修生の自己紹介（これ自体をプレゼンテーションとして位置づけし，時間制限を設けて行った）ののち，以下のような内容のレジュメを参加者全員に配布し講義を行った。(注)。総論の内容は，前掲の鶴田清司ほか『あたらしい国語科指導法』（学文社，2003）に準拠している。

・各研修生の課題構想紹介

・参考文献リスト

・「総論」／「『話すこと・聞くこと』とその教材ならびに指導法」

これらの内容に即し，なるべく研修生のクラスの実態をそのつど確かめながら，具体的な事例をまじえて講義を行った。研修全体の概論という位置づけのため，ここでは「国語のコア」とは何かに関する全員の共通理解を作ることを目的とした。たとえば読みの授業で例示した三好達治「雪」では，研修生全員に詩テクストから喚起されたイメージを語ってもらい，テクスト読解における個人性という理論を実感的に把握させるなど，同期の教員間での教材研究という12年目研修のメリットを効果的に生かすことを工夫した。

(2) 学外研修期間

12年目研修第１日目から第2日目までのほぼ１ヶ月間のブランクを有効利用するために，Aims-Gifu のシステム，特に掲示板システムを用いて近況報告やディスカッションを行った。ネットワークにアクセスさえできれば遠隔地の研修生も容易に参加でき，また夏期休業中も多忙な教員にとって自分の都合の良い時間にアクセスできるこのシステムはきわめて有効だった。

第１日目に Aims-Gifu の利用方法について簡単に実習した後，必ず１週間以内に，掲示板の「自己紹介」,「第１日目の質問」の２つのスレッドに書き込むよう根岸から指示を与えた。結果的に，「第一日目の質問」には７件の新規書き込み，それに対する呼応が15件，計22件の書き込みが行われた。

呼応の部分はさらにいくつかに分岐したため，根岸が話題ごとに新規のスレッドを立てた。ここでは研修生が独自に「音読」,「指導案作り」,「教科書」についてのスレッドを立て，計14件の書き込みが行われた。以降，それらを受けて順次，根岸が第２日目の研修内容への絞り込みのスレッド（計３教材）を立てていった。

(3) 第２日目　９月３日（金），10:00-16:00

概要は以下の通りである。

① 第１日目のレジュメの補足

A) 1－(1)「国語科教育の目的」を補足するために,直近の新聞記事から,「ある農業高の現実」（日経新聞),「養老孟司『無意識』欠落させるＩＴ社会」（朝日新聞）等を取り上げ，子どもたちの言語技術の現状とその問題点について概観した。

B) 理解における表現力育成の重大性,双方向的な言語技術教育のドラスティックな実践例（作文・説明的文章）の紹介。

② 教科書テクストの分析

これは Aims-Gifu の掲示板での研修生達の問題意識に即応して根岸が以下の教材を選定し，講義を行った後研修生をまじえてディスカッションを行った。

・中村桂子「体を守る仕組み」（４年生）：学習への動機付け

・アーノルド・ローベル「お手紙」（２年生）：解釈と音読の相関性

・「子ども環境会議」を開こう（５年生）：総合学習での国語能力

3. 12年目研修に対する大学教員の意識および今年度の総括

教育学部に所属する教員にとっては，自分の専門領域をどのように現場の小中高等学校教育と

リンクさせるかは，きわめて切実な課題だ。その意味で，あるていど課題を焦点化しそれに興味を持つ現職の教員とともに少人数のグループディスカッションや講義を集中して行える12年目研修は，貴重な交流と研究の場といえる。

昨年度と比較して，課題をかなり絞り込みまたネットワーク利用に関するリテラシーをもつ研修生という資格制限を行ったため，受講者数は9名から5名に減少した。しかし教員・研修生ともにこの岐阜大学教育学部12年目研修においてある程度の達成感をもつためには，このような条件設定は必須であると強く感じる。

Aims-Gifu の活用に関しては，情報ツールが教育分野において今後どのように展開していくかの可能性を探るための良い実践の場となった。今年度はこれまで述べたように比較的活発な場として機能したものの，やはりこれを生かすためには，個々の研修生が自宅からもアクセスできるという条件が必要であると痛感する。また投稿が散発的になった場合には，メール通知などのきめ細かい管理対策が必要だろう。要は，ネットワークツールを利用したいという動機付けの部分については，より一層指導教員の工夫が求められるのである。また12年目研修全体の位置づけにも関連するが，個々の現場教員が，学校単位の研究会ではなく個人レベルで必要とするような課題を積極的に採用し，また12年目研修での共同研究成果については，より積極的に研修生の個人評価へと結びつくようなシステムが構築されることが望ましい。

（注）項目の詳細は以下のとおりである。

1．総論
　(1) 国語科教育の目的
　(2) 教科内容と教材－言語技術教育としての側面から－
　(3) 教科内容と教材の区別
　(4) 教科内容としての言語技術
　(5) 国語嫌いの子が増えた理由
　(6) 教材から教科内容・教育内容へ進む方向性－「面白いところから入る」－
　(7) 教材研究の方法－「読み」の授業のために－

2.「話すこと・聞くこと」とその教材ならびに指導法
　(1) 話すこと・聞くことの授業の課題
　(2) 音声言語の大切さ
　(3) 音声言語授業の課題
　(4) 話すこと・聞くことの指導内容（朗読，コミュニケーション，話し合い）と，あらゆる教科の基礎としての認識
　(5) 授業に当たって気をつけたいこと